



TITLE:

後腹膜pleomorphic lipomaの1例

AUTHOR(S):

福井, 義尚; 大園, 誠一郎; 平山, 暁秀; 安川, 元信; 久門, 俊彦; 三馬, 省二; 平尾, 佳彦; 岡島, 英五郎

CITATION:

福井, 義尚 ...[et al]. 後腹膜pleomorphic lipomaの1例. 泌尿器科紀要
1991, 37(4): 373-376

ISSUE DATE:

1991-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/117160>

RIGHT:

後腹膜 pleomorphic lipoma の1例

奈良県立医科大学泌尿器科学教室 (主任: 岡島英五郎教授)

福井 義尚, 大園誠一郎, 平山 暁秀, 安川 元信, 久門 俊彦

三馬 省二, 平尾 佳彦, 岡島英五郎

A CASE OF RETROPERITONEAL PLEOMORPHIC LIPOMA

Yoshihisa Fukui, Seiichiro Ozono, Akihide Hirayama,
Motonobu Yasukawa, Toshihiko Kumon, Shoji Samma,
Yoshihiko Hirao and Eigoro Okajima

From the Department of Urology, Nara Medical University

A 71-year-old male patient was referred to our department for further examination for right retroperitoneal tumor. Exploration was done through a flank approach and the tumor with right adrenal gland was removed. A pleomorphic lipoma was diagnosed histopathologically. There have been 8 reported cases of pleomorphic lipoma including present our case in Japan and we discussed the pathogenesis and treatment of this rare disease.

(Acta Urol. Jpn. 37: 373-376, 1991)

Key words: Retroperitoneal tumor, Pleomorphic lipoma

緒 言

Pleomorphic lipoma は, 1977年に Enzinger¹⁾ が初めて報告した脂肪腫の一型である。臨床的には50歳から70歳の男性の肩と後頸を好発部位とする良性腫瘍の1つである。組織学的には多核巨細胞と太い膠原線維束および大小不同の成熟脂肪細胞とからなり、組織像の多型性のため分化型脂肪肉腫と誤られやすいとされている。

今回、われわれは、後腹膜から発生したと考えられる pleomorphic lipoma の1例を経験したので若干の文献の考察を加えて報告する。

症 例

患者: 71歳, 男性, 農業

主訴: 右季肋部痛

家族歴: 父が肺癌にて死亡

既往歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1985年ごろより右季肋部痛を自覚するも放置していた。1988年, 近医での人間ドックにて, 高血圧および腹部エコーにより右後腹膜腫瘍を指摘された。同院にて腹部 CT scan および血管造影の結果, 右副腎腫瘍の診断を受け1988年10月9日当科へ紹介され, 同年10月22日手術目的にて入院した。

入院時理学的所見: 体格, 栄養は良好で右季肋部に小児頭大の腫瘍を触知する以外とくに異常所見はなかった。血圧は 162/80 mmHg であった。検査所見は, 末梢血, 血沈, 止血機能, 血液生化学および尿検査にとくに異常は認められなかったが, 内分泌学検査において血中デオキシコルチコステロンが軽度上昇していた。

X線検査所見: 腹部単純撮影では, とくに異常所見はみられなかった。排泄性尿路撮影では, 左腎は腎盂腎杯とも造影剤の排泄良好で形態上とくに異常はみられず右腎がやや下方に偏位していた。しかし腎盂腎杯にとくに異常所見は認められなかった。腹部の単純 CT scan では右副腎部に一致して内部が均一な腫瘍が認められ (Fig. 1A), また, 造影 CT scan では内部に enhance される部分が混在していた (Fig. 1B)。

血管造影にて腫瘍血管は右腎動脈から分岐し, 上腸間膜動脈, 腰動脈は正常であった。また, 右副腎動脈がやや内側へ圧排されていた。

MRI 検査所見: T₁ 強調画像にて右腎上部にやや high intensity に描出する腫瘍が認められたが, 副腎との関係は不明であった (Fig. 2A)。また脂肪抑制画像にて low intensity に描出された (Fig. 2B) ことから, この腫瘍は大部分脂肪からなると考えられた。

以上の所見より右後腹膜腫瘍と診断し, 1988年12月

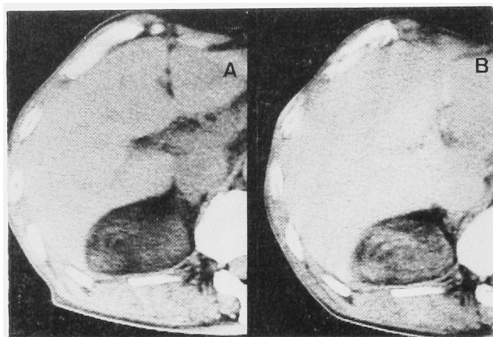


Fig. 1. Abdominal plain CT scan demonstrates a homogeneous tumor in the right retroperitoneal space (A) and this tumor is partly enhanced (B).

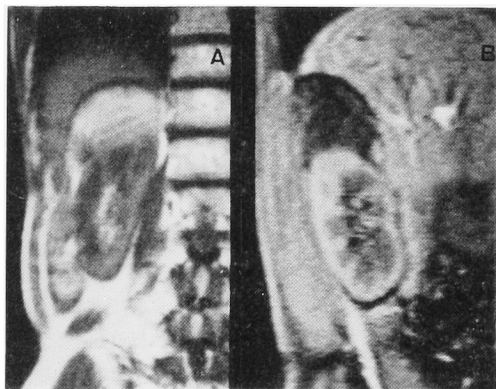


Fig. 2A. Coronal T1-weighted image shows a low intensity tumor. 2B. Chemical shift image shows a low intensity tumor.

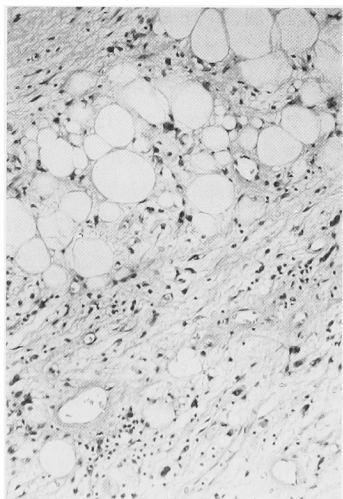


Fig. 3. Mature and immature fatty cells are seen here and there histopathologically. (HE stain $\times 400$)

Table 1. Hormone analysis of the right adrenal gland tissue and the tumor tissue

	Adrenal gland (ng/g)	Tumor (ng/g)
androstenedione	258	9.42
DHEA	93.9	6.28
testosterone	51.7	6.28
progesterone	153	3.14

22日全身麻酔下にて右後腹膜腫瘍摘出術を施行した。

手術所見：右腰部斜切開にて右後腹膜腔に達し、腎の上前方に手拳大の腫瘍を認めた。腫瘍は可動性があり周囲組織への浸潤を思わせる所見もなく、腎基部、大動脈周囲のリンパ節の腫大もみられなかった。また、ほぼ正常と思われる右副腎が腫瘍の上方に連続し認められたため、腫瘍を右副腎と共に一塊にして摘出した。

摘出標本：摘出標本は、重量 80 g、大きさ $8 \times 6 \times 4$ cm で、表面は黄褐色で弾性軟の腫瘍であった。断面は黄褐色で脂肪様、ところどころに赤褐色の部分が見られた。

病理組織学的検査：HE 染色では、mature および immature な fatty cell が混在し、その中に大小不同の核を有する immature な細胞集団が、認められたが、mitosis はなく、悪性と考えられる所見は認められなかった (Fig. 3)。

標本中のホルモン濃度 (Table 1)：腫瘍部のホルモン濃度は正常副腎のホルモン濃度に比し著明に低値を示したため、本腫瘍には副腎組織は含まれず、またホルモン産生腫瘍ではないと診断した。

術後経過：術後経過は良好で、術後約1年経過した現在、再発もなく外来で follow up 中である。

考 察

Pleomorphic lipoma は1977年に Enzinger¹⁾ が従来 liposarcoma と診断されていた症例のうち48症例を検討し臨床的、組織学的特徴を報告した特殊な脂肪腫の1つである。本腫瘍は臨床的には40歳代から60歳代の男性の後頸部、肩、背部の皮下にできる無痛性で境界明瞭な黄色の腫瘤である。また、組織学的には多核巨細胞と太い膠原線維束および大小不同の成熟脂肪細胞からなり、しかもその巨細胞は好酸性の細胞質の

Table 2. Reported cases of pleomorphic lipoma in the Japanese literature

	author	year	age	sex	origin
1	Ueno et al.	1982	56	F	orbita
2	Nakanishi et al.	1983	48	M	forehead
3	Nakanishi et al.	1983	61	F	back
4	Takemoto et al.	1984	47	M	scapular region
5	Sasaki et al.	1987	52	M	right supraclavicular fossa
6	Sakamaki et al.	1987	55	F	left upper arm
7	Hayashi et al.	1989	56	F	right palm
8	Our case	1990	71	M	left retroperitoneal space

中に濃染性の多数の核が偏在性あるいは花卉の重なり状に配列しており, floret like cell と呼ばれているものである。また, 紡錘形細胞腫との移行型をみることもあるとされ, 間質や血管周囲に形質細胞やリンパ球主体の炎症細胞浸潤を認めるが, 異常核分裂像や壊死, 変性巣は認めないとされている²⁻³⁾。

本腫瘍の組織発生についてはまだ不明であるが Shmookler ら²⁾ は spindle cell lipoma と密接な関連があるとし, また, これら2つの腫瘍が圧倒的に男性に多いことから, 両者ともホルモンやその他の性差に関連した刺激により脂肪前駆細胞または未知の先駆細胞が反応した共通の間葉細胞の反応性に基づく一連の疾患であるとしている。また Beham ら⁴⁾ は免疫学的な方法を用いることにより pleomorphic lipoma が, 脂肪細胞と脂肪を含まない間葉系細胞からなり, その構成が spindle cell lipoma とほぼ同一であることを示している。

Pleomorphic lipoma の鑑別診断には多型脂肪肉腫, 粘液型脂肪肉腫, 壊死型脂肪肉腫や spindle cell lipoma があげられる。多形型脂肪肉腫はシート状の増殖領域がみられ, floret like cell 類似の巨細胞がみられるものの多数の脂肪芽細胞や核分裂像, 細胞異形成がみられることにより鑑別できる。粘液型脂肪肉腫では, 巨細胞は一般にみられず, 多数の脂肪芽細胞や豊富な毛細血管網がみられる。硬化型脂肪肉腫は強い線維化および膠原化があり, また異型脂肪芽細胞や異型的な有糸核分裂がみられる。spindle cell lipoma はもっとも鑑別が困難と思われるが pleomorphic cell や floret cell が存在しないことで区別される。

自験例は後腹膜腔より発生した症例で, 一般的に pleomorphic lipoma とは発生部位が異なるが, 病理組織学的に大小不同の mature または immature な脂肪細胞と太い膠原線維束および多核巨細胞とからなり, そのなかに大小不同の核を有する immature な

細胞が花卉状に配列しており, 核分裂像や異型性がないことより pleomorphic lipoma と診断した。

Pleomorphic lipoma は1977年 Enzinger らが初めて報告してからまだ10年余りしか経過しておらず, その位置づけもいまだ確立されていないため, 本邦での報告例もわれわれが調べた限りでは自験例を含めて8例にすぎない⁵⁻¹⁰⁾ (Table 2)。後腹膜に発生した報告例は本邦にはみられず, 第1例目と考えられた。自験例は術後14カ月しか経過しておらず, 局所再発を含め長期にわたる follow up が必要と考える。

結 語

71歳の男性の後腹膜に発生した pleomorphic lipoma と考えられる1例を経験した。本症はわれわれが調べたかぎりでは本邦8例目にあたり, また後腹膜に発生した第1例目で, 若干の文献的考察を加え報告した。

本論文の要旨は第129回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- 1) Enzinger FM: Benign lipomatous tumors simulating a sarcoma. In: Management of primary bone and soft tissue tumors. Edited by Martin RG and Ayala AG. pp. 11-24, Years Book Medical Publishers, Chicago, 1977
- 2) Shmookler BM and Enzinger FM: Pleomorphic lipoma: a benign tumor simulating liposarcoma. A clinicopathologic analysis of 48 cases. Cancer 47: 126-133, 1981
- 3) Bolen JW and Thorning D: Spindle-cell lipoma. A clinical, light-and electron-microscopical study. Am J Surg Pathol 5: 435-441, 1981
- 4) Beham A, Schmid C, Hödl S and Fletcherch DM: Spindle cell and pleomorphic lipoma:

- an immunohistochemical study and histogenetic analysis. *J Pathol* **158**: 219-222, 1989
- 5) 上野泰志, 山之内宏一, 永石順子, ほか: 眼窩 pleomorphic lipoma の1例. *眼紀* **33**: 1493-1504, 1982
- 6) 中西純夫, 野村日出夫, 檜澤一夫: Pleomorphic lipoma の2例. *病理と臨床* **1**: 780-785, 1983
- 7) 竹本 剛, 小武家俊博: Pleomorphic lipoma. *広島医学* **38**: 359, 1985
- 8) 佐々木美和子, 鈴木伊津子, 大井綱郎, ほか: Pleomorphic lipoma の1例. *日皮会誌* **97**: 502, 1987
- 9) 酒巻治彦, 吉沢夏人, 有田 寛: Pleomorphic lipoma の1症例. *関東整災誌* **19**: 355-357, 1988
- 10) 林 徳真吉, 津田暢夫, 島田 修, 前田 公: 手掌に生じた pleomorphic lipoma の1例, — spindle cell lipoma との比較—. *癌の臨床* **35**: 437-441, 1989

(Received on May 1, 1990)

(Accepted on June 1, 1990)